

研究報告

実習体験が看護大学生の保健・看護職としての成長におよぼす要因

武田かおり^{1)*}、鉢呂美幸¹⁾、水野芳子¹⁾

¹⁾名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：看護大学生、社会的スキル、看護実践力、実習

1. はじめに

臨地実習（実習）は、臨床と連携した学習形態をもち、看護理論と実践を結びつけて理解するために、知識・技能の習得が社会人基礎力を高める¹⁾といわれており、実習での学びが卒業後の看護職としての能力に影響をおよぼす要因といえる。著者らの研究²⁾から、実習での学びに社会的スキルの高さが影響しており、自己紹介を含む基本的スキル、自分の感情コントロールや他者との関係維持など対人関係を円滑に運ぶために役立つ技能・能力の不足が、学生の実習体験を困難にしていることがわかった。スキルの低い学生は、困難な場面に對峙した際の状況分析や対処が難しいと考えられる。患者との対人関係の形成は、同年代で上手に対応できた対人スキルとは異なり、患者の発達段階に応じた方法や保健医療専門職者と対象者という関係を形成する必要がある。教員が学習のための適切な介入を図り、学生の成長を促し、スキルアップにつながる実習にするためには、学生の特性を知ることは重要である。

本研究は、実習での学びに影響する社会的スキルと看護実践力、学生の特性としての生活体験や自己認知傾向との関連、実習で困難と感じる状況を知ること、学生の個別性をふまえた実習での学びや成長を促す要因を明らかにするものである。

2. 用語の定義

看護実践力：Meretojaら³⁾の看護師の能力の定義を参考に、看護ケアの望ましい成果を伴うタスクの遂行、専門的知識と技術の効果的な適応、看護実践の省察をするための能力とした。

3. 方法

1) 調査対象

A大学看護学科の1年生から4年生までの204名の学生を対象に、2012年11月から12月までに実施した。

2) 質問紙

質問紙は、①基本属性、②生活背景、③社会的スキル、④自己認知傾向、⑤実習の困難、⑥看護実践力を含む構成とした。⑤実習の困難および⑥看護実践力の対象者は、実践を主とした看護学実習を体験した大学2・3・4年生のみとした。各質問項目の概要は以下のとおりである。

①基本属性：性別や年齢、学年について質問した。

②生活背景：アルバイト、サークル活動、勉強時間や就寝時刻などを質問項目とした。

③社会的スキル：社会的スキルを測定するにあたって用いた質問項目は、菊池⁴⁾によって開発されたKiSS-18（Kikuchi's Scale of Social Skill-18 items）である。KiSS-18は若者の社会的スキルを測定する18項目から構成されており、下位尺度は、i)基本的なスキル ii)より高度なスキル iii)感情処理スキル iv)攻撃に代わるスキル v)ストレス処理のスキル vi)計画のスキルの6つからなる。5段階評定で、得点が高いほど社会的スキルが高い。

*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地
E-mail:takeda.k@nayoro.ac.jp

④自己認知傾向 自己認知傾向として、速水ら⁵⁾が作成した仮想的有能感を測定する尺度Assumed-Competence Scale (以下ACS) を用いた。仮想的有能感は、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚と定義づけられ、他者軽視という他者認知傾向の裏側に隠された自己認知傾向である。ACSは11項目、5段階評定で、得点が高いほど他者軽視、すなわち仮想的有能感が高いことになる。信頼性や妥当性が確認されている⁶⁾尺度である。

⑤実習の困難：滝下ら⁷⁾や三枝⁸⁾の実習における困難体験を参考に、質問紙を作成した。患者に関する困難（患者困難）が5項目でコミュニケーション・援助方法・アセスメント・看護計画の立案・患者の心理面の理解や対応、自分自身に関する困難（学生困難）が4項目で知識不足・技術不足・自分の性格や行動傾向・個人的な事情、実習全般に関する困難（全般困難）が4項目で実習日程や実習記録・実習環境・実習の指導方法・実習指導者や教員との関係を質問内容とした計13項目とした。評定は「0ない」～「4かなりある」の5段階で、得点が高いほど実習での困難があったことを示す。分析には全項目および各項目の合計得点を用いた。

⑥看護実践力：細田ら⁹⁾が作成した看護実践力尺度を用いた。看護実践力は「志向する力」3項目、「展開する力」5項目、「実施する力」6項目、「評価する力」6項目から構成されており、「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5段階リッカートスケールであり、その信頼性と妥当性は確認されている¹⁰⁾。

3) 調査方法

対象となる看護大学生に対して、各学年の講義終了後の集団に対して研究目的や概要、倫理的配慮を説明し、無記名自記式質問紙を配付した。回収はA大学内に設置した回収ボックスへの投函により実施した。

4) 分析方法

分析はPASW Statistics 18を用いて行った。社会的スキル・基本属性・生活背景をピアソンの相関関係で、社会的スキル・自己認知傾向・実習の困難・看護実践力をスピアマンの相関関係で分析した。有意水準は5%未満とした。

5) 倫理的配慮

質問紙調査は、講義終了後の集団に対して研究目的と方法、以下の内容を文書および口頭で説明し、回答用紙の投函をもって研究への参加同意と判断した。

①研究目的、方法、内容、所要時間について

②研究参加は自由であり、研究参加の同意が得られた場合でも、研究参加の同意を取り消すことが可能であること

③質問紙は無記名で個人が特定されないように配慮すること、記載内容や研究協力の諾否が成績に一切影響せず不利な状況にならないこと

④得られたデータは個人が特定されないように管理すること、研究終了後シュレッダーを用いて破棄すること

⑤研究結果は、個人が特定されない内容で関連学会での発表や投稿予定であること

なお、本研究は名寄市立大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 結果

対象者204名に対して研究への協力を依頼し、128名（回答率62.8%）より質問紙への回答を得た。このうち欠損値のあるデータを除いた115名（有効回答率56.4%）を分析対象とした。

1) 基本属性および生活背景（表1）

女性106名、男性9名、平均年齢は20.3歳、学年ごとでは1年生34名、2年生27名、3年生22名、4年生32名であった。生活背景のうち、全学年のアルバイトは105名（91.3%）が経験しており、サークルやボランティアは81名（70.4%）が参加経験を持っていた。全学年の平均勉強時間は3時間18分/日、平均睡眠時間は5時間54分/日、平均就寝時刻は24時54分であった。

表1 学年ごとの基本属性および生活背景

(n=115)

		1年	2年	3年	4年	全学年	無回答
性別	女性	30	26	22	28	106	0
	男性	4	1	0	4	9	0
年齢		18.6	20.0	20.8	22.1	20.3	0
アルバイト	あり	31	26	17	31	105	0
	なし	3	1	5	1	10	0
サークル ボランティア	あり	33	15	15	18	81	3
	なし	1	10	7	13	31	3
勉強時間		1:18	1:12	3:30	6:54	3:18	13
睡眠時間		6:12	5:48	5:00	6:24	5:54	13
就寝時刻		24:42	25:30	24:00	25:00	24:54	3

2) 学年ごとの尺度得点 (表2、図1)

社会的スキルと自己認知傾向は全学年の115名、実習の困難と看護実践力は2・3・4学年の81名を対象とした。

社会的スキルの総得点および下位尺度の全学年平均点は、総得点49.89点、基本的スキル8.50点、より高度なスキル8.12点、感情処理スキル8.38点、攻撃に代わるスキル8.52点、ストレス処理7.94点、計画スキル8.42点であった。下位尺度ごとに平均得点が高かった学年は、基本的なスキル8.73点 (3年生)、より高度なスキル8.36点 (3年生)、感情処理スキル8.82点 (3年生)、攻撃に代わるスキル9.23点 (3年生)、ストレス処理のスキル8.15点 (1年生)、計画のスキル8.95点 (3年生)、総得点52.18点 (3年生) であった。

自己認知傾向の全学年平均点は23.41点、得点が高いのは2学年24.81点、次いで1学年24.06点、3学年22.77点、4学年21.97点となった。

実習の困難の2年生から4年生の平均点は、総得点26.91点、患者困難10.83点、自分困難9.05点、全般困難7.04点であった。総得点および各項目の平均点が高かったのは2年生で、それぞれ33.33点、14.04点、11.48点、7.81点であった。

看護実践力の全学年平均点は、総得点52.15点、志向力8.48点、展開力13.04点、実施力15.77点、評価力14.86点であった。看護実践力および下位尺度ごとの平均得点が高かったのは2年生で、平均点は55.11点、志向力9.41点、展開力14.22点、実施力16.44点、評価力15.04点であった。

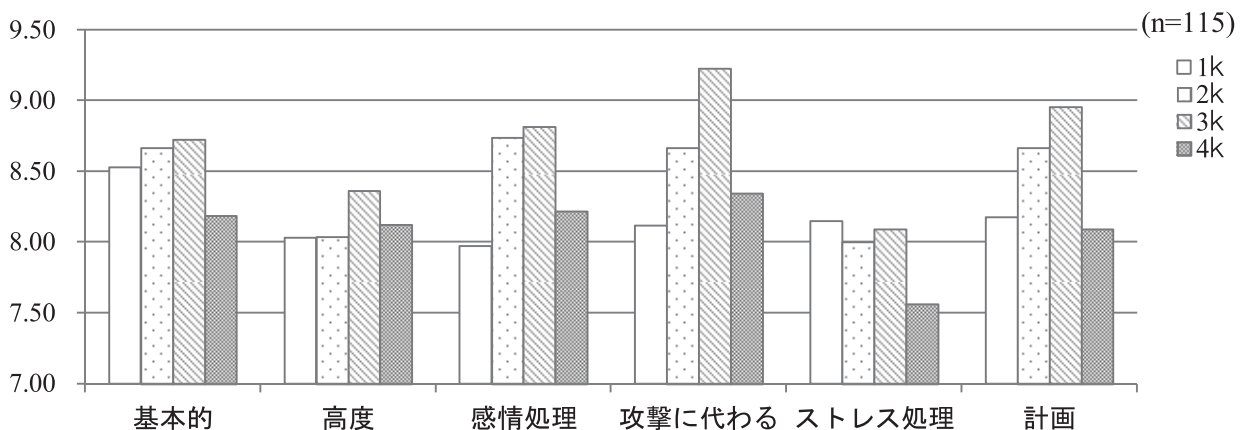


図1 学年ごとの社会的スキル下位尺度平均得点

表2 社会的スキル、自己認知傾向、実習の困難、看護実践力の学年ごとの平均得点

(n=115、実習の困難・看護実践力 n=81)

		1年	2年	3年	4年
社会的スキル	総得点	48.97	50.78	52.18	48.53
自己認知傾向		24.06	24.81	22.77	21.97
実習の困難	実習の困難		33.33	29.14	19.97
看護実践力	看護実践力・総得点		55.11	52.14	49.66
	志向力		9.41	8.36	7.78
	展開力		14.22	13.05	12.03
	実施力		16.44	15.86	15.13
	評価力		15.04	14.86	14.72

3) 社会的スキルとの関連 (表3)

①基本属性・生活背景 (全学年)

全学年の社会的スキルの総得点および下位尺度と年齢、勉強時間、睡眠時間、就寝時刻との相関関係を測定した結果、有意な相関はみられなかった。

②自己認知傾向、実習の困難、看護実践力 (2・3・4年)

2・3・4年の社会的スキルの総得点および下位尺度と自己認知傾向、実習の困難、看護実践力との相関関係を測定した結果、自己認知傾向、実習の困難との有意な相関はみられなかった。看護実践力との間では、社会的スキルの下位尺度「より高度」「感情処理」「攻撃に代わる」と看護実践力の下位尺度「志向力」との関係を除いた総得点と下位尺度との間に、有意な相関がみられた。

表3 社会的スキルと看護実践力との相関関係

(n=81)

	志向力	展開力	実施力	評価力	看護実践力
基本的	0.29*	0.32*	0.42**	0.37*	0.42**
より高度		0.50**	0.54**	0.56**	0.58**
感情処理		0.33*	0.37*	0.33*	0.36*
攻撃に代わる		0.35*	0.43**	0.43**	0.43**
ストレス処理	0.30*	0.47**	0.47**	0.46**	0.51**
計画	0.46**	0.56**	0.56**	0.49**	0.61**
KiSS	0.37**	0.54**	0.59**	0.56**	0.62**

$p < .05$:*, $p < .01$:**

5. 考察

1) 学生の生活背景について

学生は、9割以上がアルバイトを経験し、サークルやボランティアなどへも7割以上が参加経験を持っており、積極的な対人関係をもつ経験をしている学生が多い。

勉強時間は1・2年生では変わらないが、3年生では3倍、4年生では6倍に増えている。調査時期は12月で、1・

2年生にとっては冬休み前、3年生は実習中、4年生は卒業研究を終了し国家試験へ気持ちが向いている時期であったことが3・4年生の勉強時間に反映している。睡眠時間や就寝時間には同様な傾向がみられていないため、1・2年生は勉強以外の自由時間を多く持っているといえる。1・2年生に比べ、実習中である3年生の平均的な一日は、5時起床、8時～17時まで実習し、3時間30分勉強し、24時就寝と予測すると、それ以外の時間は5時間程度と考えられる。移動時間や食事・保清時間を含めると自由な時間がほぼない生活をしている。4年生においても卒業研究の論文提出を終了し、国家試験のための勉強へ本腰を入れる時期であり、ともに緊張感ある日々を過ごしているといえる。

2) 尺度得点の学年的変化と客観的評価

対人関係に自信をもつ看護学生は社会的スキルが高い⁹⁾と言われているが、本研究では全学年の平均点が昨年度の調査を5.6点下回り、KiSS-18の大学生標準化総得点⁸⁾53.08点よりも3.19点低い結果となった。調査時期に大きな差異はなく、1～4年のすべての学年で同様の傾向がみられる原因については、さらなる調査が必要と考える。

下位尺度であるストレス処理のスキル（矛盾した情報の処理、集団圧力への対応など）を除く下位尺度と総得点は1年生から順に平均点が高くなり3年生を最高点とする上昇がみられるが、4年生は2・3年生より低かった。1～3年生は昨年度の自分自身と比較しスキルが高まっていると判断したため、年次が上がるに従い、スキル得点を上昇させたと考える。しかし、就職を4か月後に控えた4年生は昨年までの自分ではなく、実習先で指導を受けた現職の看護師や保健師を比較対象に据え、学生としてではなく専門職として自分自身のスキル評価を行ったのではないだろうか。昨年からの成長による評価ではなく、未来の自分のあるべき姿として捉えた他者との比較、すなわち客観的評価ができるようになったと考える。

自分自身の能力を客観視したと思われる結果は、「看護実践力」からも考えられる。実習において、より実践的な看護実習を求められる2～4年を対象にした結果からは、学年が上がるごとに得点が低下する傾向がみられた。実習での課題は、学年および学生の能力があがるほどに患者への一般的な対応から個別的な対応へとレベルアップするため、多様なアセスメント能力が求められる。4年生になると専門的看護職の実践を意識した高い能力としての多角的視野と柔軟な対応が必要となるため、それに伴う知識・技術課題が要求される。そのため、「看護実践力」の問いに対し看護学生としてではなく専門的看護職としての視点で考え、より高いレベルのロールプレイモデルでもある他者と自分を客観的に比較し、自らの実践能力を低く見積もったのではないかと考える。「実習の困難」の結果からは、学年を追うごとに困難を感じなくなるという結果が得られた。2年生と3年生では4.19点、3年生と4年生では9.17点の差があり、実習の困難が学年を追うごとに少なくなる傾向が示されている。患者や自分自身、実習全般での困難が減りながらも看護実践力が低下するのは、自らの能力査定基準となる対象が変化し、全体的な視野をもってみるようになるからではないかと考える。

新卒看護師の就業継続には、自己を適切に客観視し看護専門職者の自律的態度を養い、自立した社会人としての責務を理解する必要がある¹⁰⁾といわれている。適切な客観視をするためには、自尊感情をもつことのほかに、他者軽視せずに自己評価する必要があると考えられ、「自己認知傾向」は他者軽視による自己評価の程度を示している。1・2年ではほぼ差がないが、3年、4年と徐々に得点の低下がみられることから、学年が上がることに適切な客観的自己評価が可能になっているのではないかと考えられる。

3) 看護職者として客観的自己評価を獲得する意義

客観的評価を身につけることは、看護職としての知識・技術の活用である対象者への看護活動の習得へとつながる。実習の多くは病院などの保健医療施設で、専門医療職が対象者に対して活動を実践している場で行われる。学生への教育が主目的である学内での授業ではなく、治療や看護を主としている場であることから教わる姿勢ではなく、学生自身が主体的に観察し、経験し、見学から実践へと積極的に学習する必要がある。

る。しかし保健医療施設での実習は、準備された場面を教材として活用することはなく、教員や臨床指導者が立ち会わない場面であっても学生は自らの価値基準に従ってあらゆる場면을学習教材として影響を受けている可能性がある。どのような活動をモデルとして模倣対象とするのかは、学生が身につけた価値基準による。自尊感情の低下や他者軽視による自己評価を行う場合は、自らの成長に視点があるため、専門看護職者としてのスキルを獲得することが難しくなるといえる。学生がもつ確立されていない看護職としての価値基準を適切なものとし、教材とすべき場面や模倣すべきロールプレイモデルを適切に選択できるよう導く教授は、実習以前の学内での講義・演習時から獲得し始めていると考えられる。ゆえに、教員は看護師として知識や技術の活用、看護過程の重要性など熟達した看護実践力を示す行動について考える機会を与え、学生の模倣対象となり、価値基準の形成を支援する機会を提供する必要がある。それにより、実習における適切な模範を見つけ、目標をもち、モチベーションを維持しながらの学習への姿勢を保つことができると考える。

参考文献

- 1) 北島洋子、細田泰子、星和美：看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討、大阪府立大学看護学部紀要17(1)、p13-23、2011
- 2) 武田かおり、鉢呂美幸、工藤恭子：看護大学生の社会的スキルに関連する生活および実習体験、地域と住民30、p21-27、2012
- 3) Meretoja,R., Isoaho,H., &Leino-Kilpi,H., Nurse Competence Scale:development and psychometric testing, Journal of Advanced Nursing, 47、p124-133、2007
- 4) 菊池章夫、長濱加那子：KiSS-18の妥当性についての一資料、尚綱学院大学紀要56、p261-264、2008
- 5) 速水敏彦、木野和代、高木邦子：仮想的有能感の構成概念妥当性の検討、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）51、p1-7、2004
- 6) 堀洋道、吉田富二雄、宮本聡介：自尊感情・自己評価、心理測定尺度V個人から社会へー自己・対人関係・価値観一、サイエンス社、東京、2011、p37-39
- 7) 滝下幸栄、岩脇陽子、松岡知子、山本容子、西田直子、鈴木ひとみ：基礎看護実習Ⅱの評価と課題、京都府立医科大学紀要17、p93-99、2008
- 8) 三枝香代子：成人看護学実習において学生が体験する困難 - 卒業生のアンケート調査を基に -、千葉県立衛生短期大学紀要26(1)、p77-88
- 9) 細田泰子、荒木孝治、古山美穂ほか：看護学士課程の情報活用の実践力と看護実践力の関連 eラーニング導入前における学年間比較、大阪府立大学看護学部紀要13(1)、p19-26、2007
- 10) 藤野ユリ子、室屋和子、佐藤一美：看護系大学四年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル、産業医科大学雑誌30(3)、p263-272、2005
- 11) 塚本友栄、舟島なをみ：就職後早期退職した新人看護師の経験に関する研究ー就業を継続できた看護師の経験を通してー、看護教育学研究17(1)、p22-35、2008